強度行動障がい児への療育事業

～Spaceの取り組みについて～

大阪府障害者福祉事業団

大阪府立金剛コロニーすぎのき寮

主査　冨賀　博文

本日の進め方

1. 「強度行動障害児特別支援加算費」の概要

2. 実際の療育場面について

3. 成果と課題

1.「強度行動障害児特別支援加算費」の概要

強度行動障がいとは

（定義）

　強度行動障がいとは、自傷・他傷・排泄関係や睡眠の乱れ、興奮等が通常では考えられない頻度と形で出現し、著しく支援が困難な状態で、その養育環境では著しく処遇の困難な者

行動障がいの具体例

- 額を打ち付ける自傷行為が頻回なため、ガーゼをするが、すぐにはずしてしまう。薬を塗るが、拭い去ろうとして傷口を触り、結果止血も難しい
- 頬骨を叩く自傷行為が頻回にあるため、顔の形が変形してしまっている
- 破衣行為が毎日あるため、裸で過ごすことが多い
- 異食のため、排泄物の中から糸くず・布切れが出てきたことがある
- 反すうして歯が根元から朽ちている

- 強度行動障がいは、表出した状態を表す言葉で、自閉症などのように医学的に診断されたものではない（＝行動的に定義される群）
- 「強度行動障害判定指針」を基にした、「強度行動障害判定基準」のスコアリング結果により、

10点以上・・・強度行動障がい

20点以上・・・「強度行動障害児特別支援加算費」の対象

「強度行動障害児特別支援加算費」の目的

- 「強度行動障害児特別支援加算費」とは地域や家庭で支援困難な児童を施設で受け入れ、療育などを通して不適切な行動の軽減や行動改善を図ること
- 対象者の情報収集を通して有効な支援方法の検討、個別プログラムを作成する
- 保護者への理解や啓発活動の実施
- 支援学校や医療機関、援護機関との連携
- 地域とのネットワーク構築
- 再び地域生活へ戻ることが大目標

事業実施①

- 設置基準（＊別紙参照）
- 対象者は4名以下（事業標準）
- 1期3年の有期限
- 支援員は専任3名（平日は生活棟と併任）
- 事業は生活棟ではなく、別棟の事業棟で実施
- 日中は支援学校に通学
- 事業は週末や祝日、夏休み・冬休みの学校休業日を中心に実施

「強度行動障害児特別支援加算費」による療育事業を、すぎのき寮では・・・

「　Space（スペース）　」と呼んでいます

- Space（スペース）の由来

「必要だけれどもさりげない」そんな空間であってほしいとの願いから・・・

事業実施②

- TEACCHプログラムの考え方を基にした療育活動の組み立て（＝構造化支援）
- 自立度を高める
- PDCAサイクルに則った再構造化
- 対象者のパーソナリティを注視するのではなく、環境調整に焦点を当てる
- 活動は楽しく終えること（＝肯定的な関わり、自己肯定感、達成感の付与）
- 対象者のスキルアップ＝スタッフのスキルアップ

これまでの経過

- 平成13年（2001年）4月から事業開始
- 現在15年目を迎え、第5期目を実施中
- 事業対象となった利用者数は20名以上
- 「強度行動障害判定基準」により40点台の評価点数だった対象者が、1桁台　or　10点台にまで改善できた例もある
- 1名の中途退所による地域・家庭復帰を除き、地域生活は実現していない

療育開始までの主な流れ

- 生活棟（すぎのき寮）へ入所

- 家庭での生活ぶりや資料を基に、「強度行動障害判定指針・判定基準」によるスコアリング

↓

フォーマルな評価

↓

評価に基づく個別プログラム作成に向けて検討

評価尺度を用いたスコアリング

- 評価尺度を用いて数値化することで、どの程度の行動障がいがあるか判定

（スコアリングの手順）

- 「強度行動障害判定指針」を基に、対象者が表出する行動障がいを項目別にまとめる
- 「強度行動障害判定基準」と照らし合わせ、各項目における行動障がいの発生頻度から点数を算出する
- 11項目で55点が最高

強度行動障害判定指針

強度行動障害の目安と内容例

行動障害の内容	行動障害の目安の例示
1　ひどい自傷	肉が見えたり、頭部が変形に至るような叩きをしたり、つめをはぐなど。
2　強い他傷	噛みつき、蹴り、なぐり、髪ひき、頭突きなど、相手が怪我をしかねないような行動など。
3　激しいこだわり	強く支持しても、どうしても服を脱ぐとか、どうしても外出を拒みとおす、何百メートルを離れた場所に戻り取りにいく、などの行為で止めても止めきれないもの。
4　激しいもの壊し	ガラス、家具、ドア、茶碗、椅子、眼鏡などをこわし、その結果危害が本人にもまわりにも大きいもの、服を何としてでも破ってしまうなど。
5　睡眠の大きな乱れ	昼夜が逆転してしまっている、ベッドについていられず人や物に危害を加えるなど。
6　食事関係の強い障害	テーブルごとひっくり返す、食器ごと投げるとか、椅子に座っていれず、皆と一緒に食事できない。便や釘、石などを食べ体に異状をきたしたことのある拒食、特定のものしか食べず体に異状をきたした偏食など。
7　排泄関係の強い障害	便を手でこねたり、便を投げたり、便を壁になすりつける。強迫的に排尿排便行動を繰り返すなど。
8　著しい多動	身体・生命の危険につながる飛びだしをする。目を話すと一時も座れず走り回る。ベランダの上など高く危険な所に上る。
9　著しい騒がしさ	たえられない様な大声を出す。一度泣き始めると大泣きが何時間も続く。
10　パニックがもたらす結果が大変なため処遇困難	一度パニックが出ると、体力的にもとてもおさめられずつきあっていかれない状態を呈する。
11　粗暴で相手に恐怖感を与えるため処遇困難な状態	日常生活のちょっとしたことを注意しても。爆発的な行動を呈し、かかわっている側が恐怖を感じさせられるような状況がある。

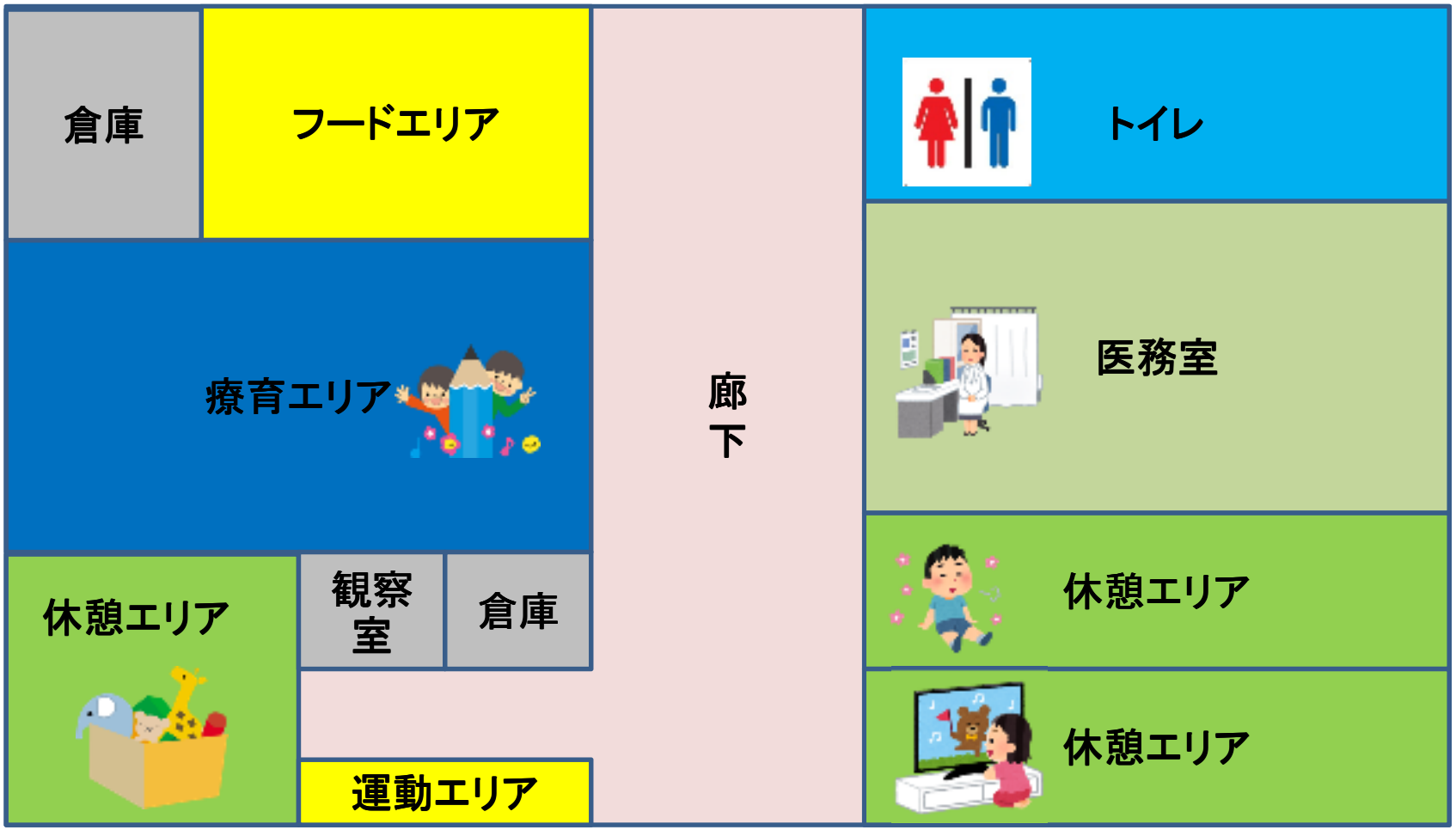
強度行動障害判定基準表

行 動 障 害 の 内 容	1点	3 点	5 点
1　ひどい自傷	週に1・2回	一日に1・2回	一 日 中
2　強い他傷	月に1・2回	週に 1・2回	一日何度も
3　激しいこだわり	週に1・2回	一日に1・2回	一日何度も
4　激しい物壊し	月に1・2回	週に 1・2回	一日何度も
5　睡眠の大きな乱れ	月に1・2回	週に 1・2回	ほぼ 毎日
6　食事関係の強い障害	週に1・2回	ほぼ 毎日	ほぼ 毎食
7　排泄関係の強い障害	月に1・2回	週に 1・2回	ほぼ 毎日
8　著しい多動	月に1・2回	週に 1・2回	ほぼ 毎日
9　著しい騒がしさ	ほぼ毎日	一 日 中	絶え間なく
10　パニックがひどく指導困難			あ れ ば
11　粗暴で恐怖感を与え指導困難			あ れ ば

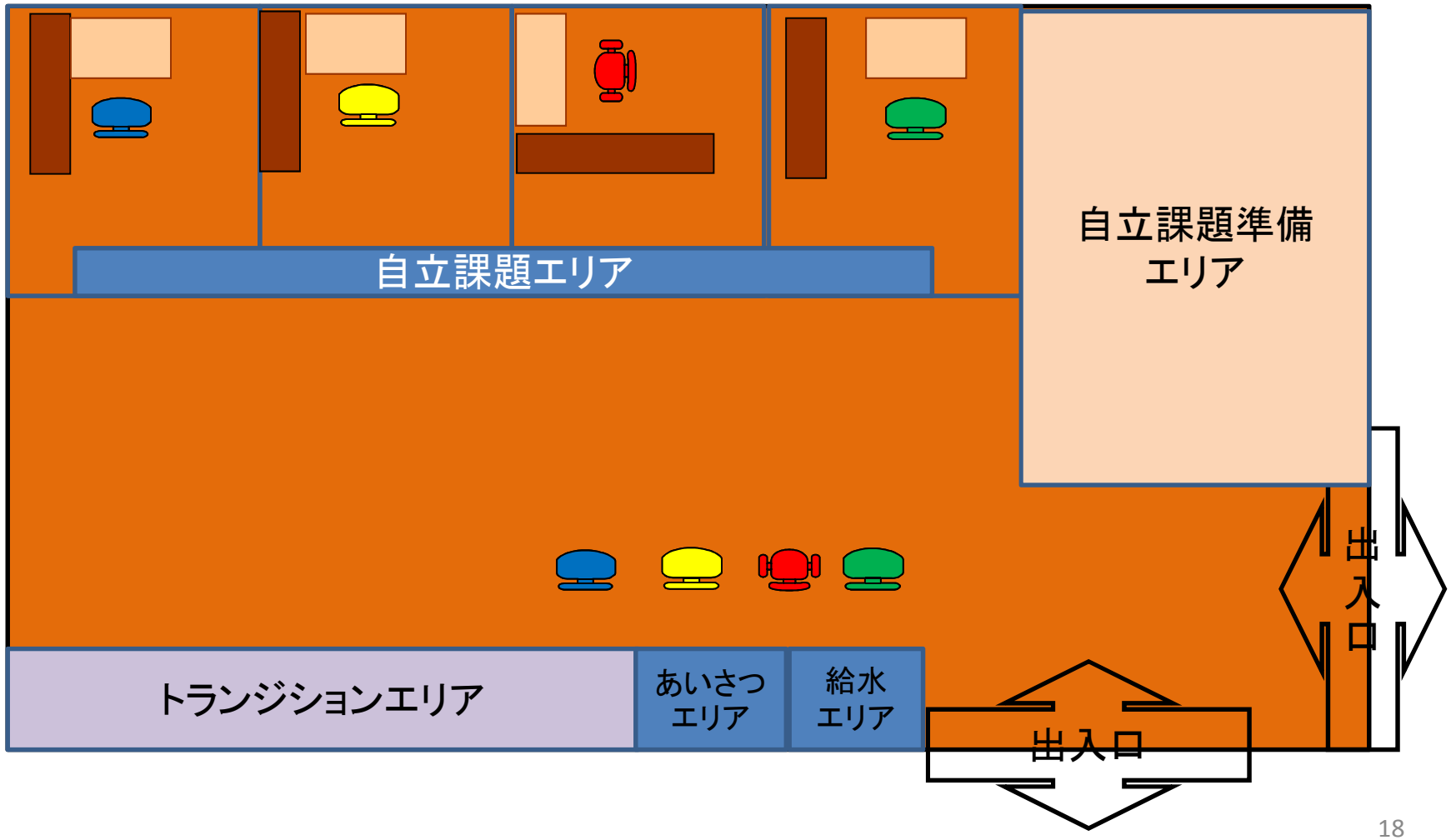
「強度行動障害判定基準表」より　厚生労働省1993年

2. 実際の療育場面について

事業棟レイアウト



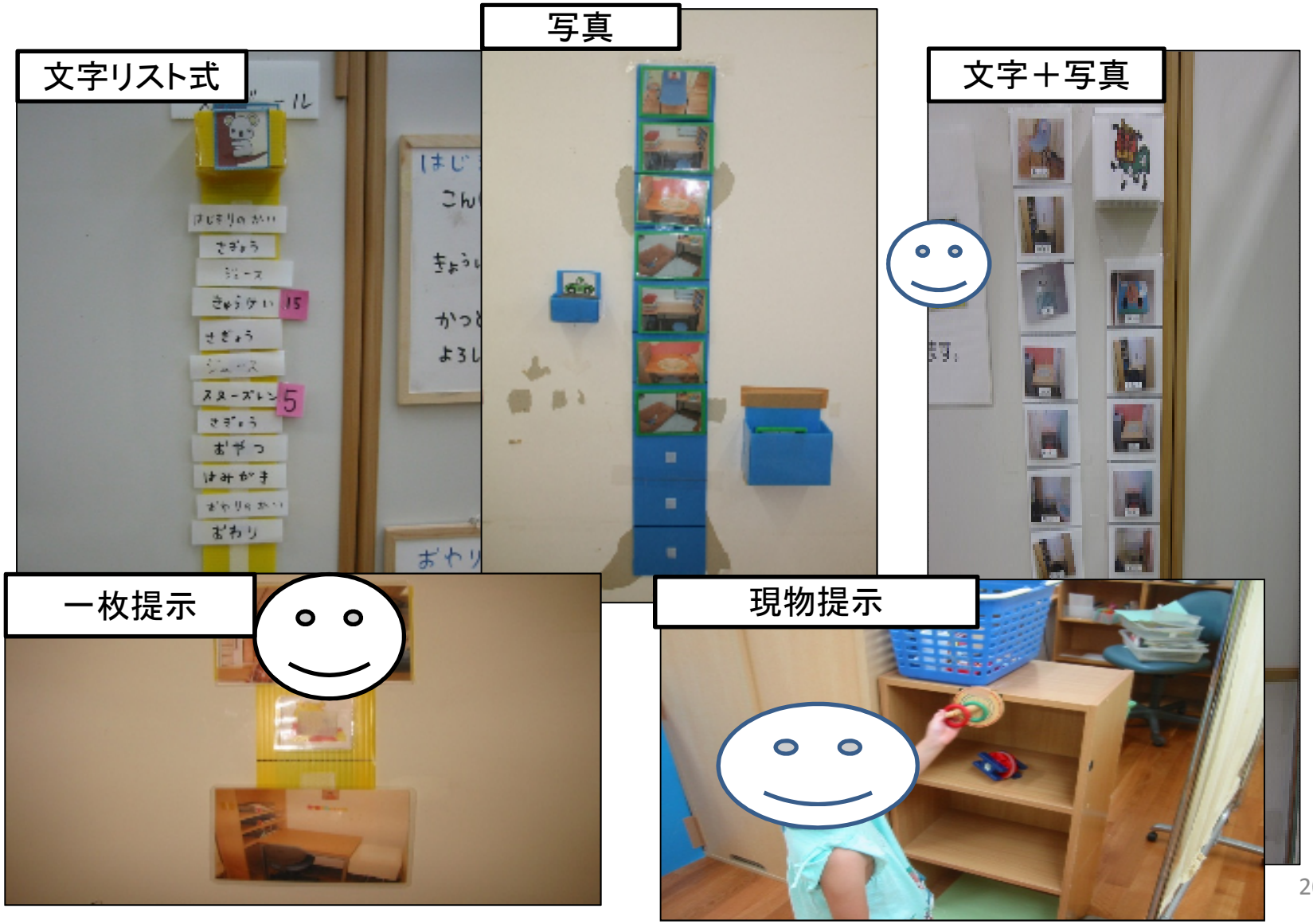
療育エリア



スケジュール

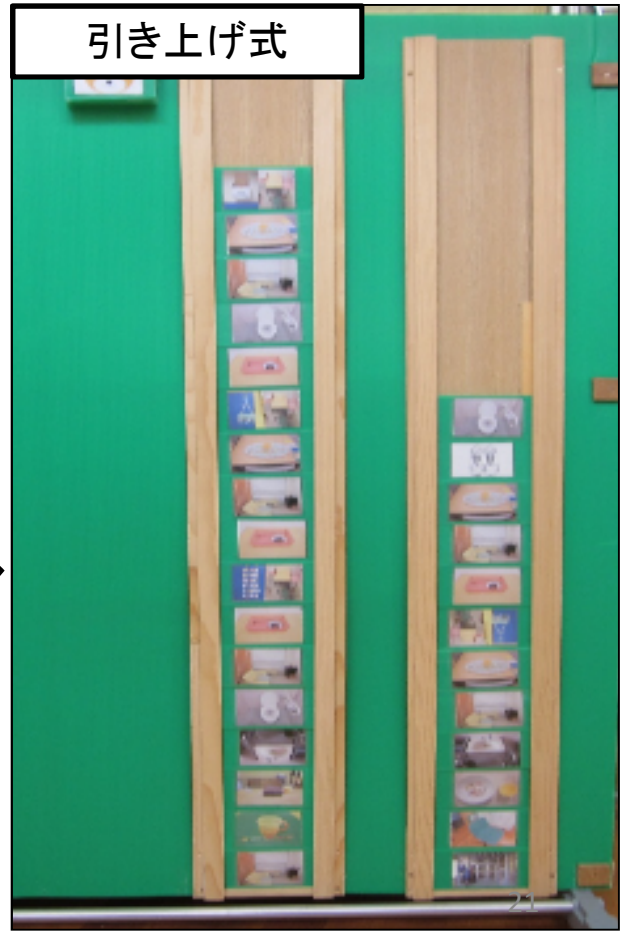
- スケジュールとは、想像性に障がいの特性があり、先の見通しが持ちにくいため、視覚的に時間の流れを示したもの
- 対象者の理解の仕方に合わせる
- 定着に向けて、プロンプト（＝教授）を行いながら、繰り返し取り組む
- 定着が進まない時は、対象者の理解の仕方を振り返り、再構造化を行う

スケジュールの一例



＜物理的に上から順にしか取れない構造＞

- 上から順にカードを取ることが難しい
- 興味があるものや目についたカードから取ってしまう
- マジックテープから剥がしたり、をめくる動きが難しい



自立課題

- 自立課題は、自分で興味を持って自立的に取り組める要素で構成されている
- フォーマルな評価によって導き出された結果を基に、芽生え行動から“できる行動”へのプロセスを意識した組み立て
- 自立して取り組むこと（＝自己肯定感を向上させる）
- スモールステップを繰り返し、集中できる時間を伸ばす

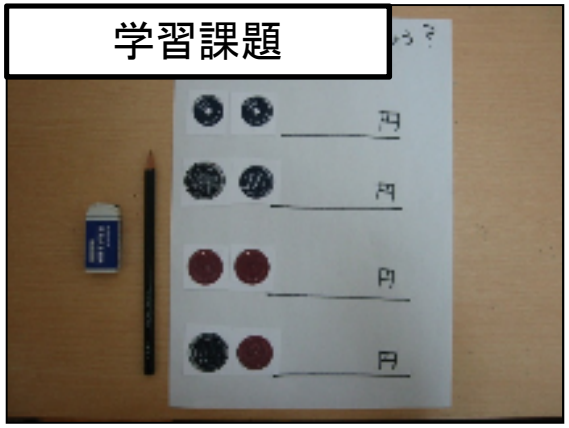
自立課題の一例

プットイン

マッチング・分類

ビーズ通し

学習課題



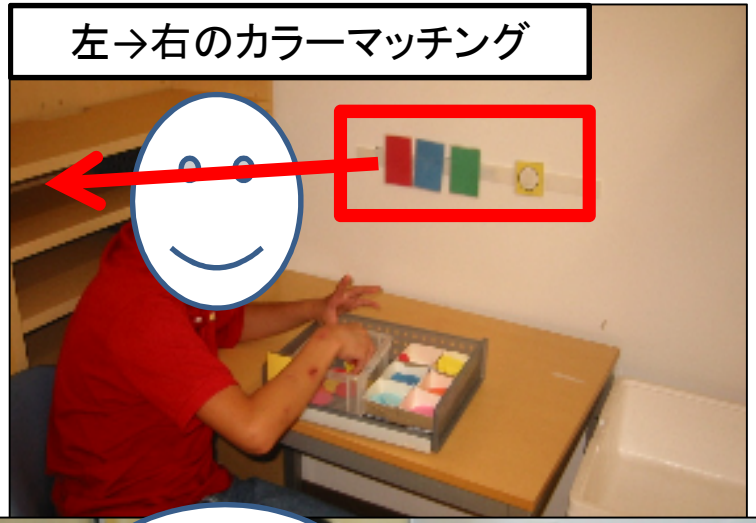
組立・分解

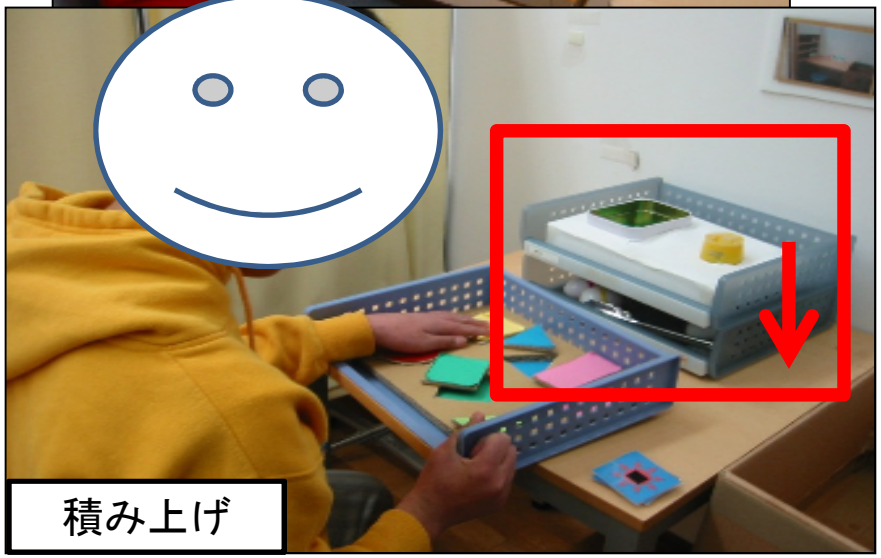
パッケージング

ワークシステム

- ワークシステムとは、課題に対してどのような手順で取り組むかを視覚的に示したもの
- 対象者の理解の仕方に合わせて提示する
- 定着に向けて、プロンプトを行いながら、繰り返し取り組み、自立化を図る
- 定着化が進まない時は、対象者の理解の仕方を振り返り、再構造化を行う

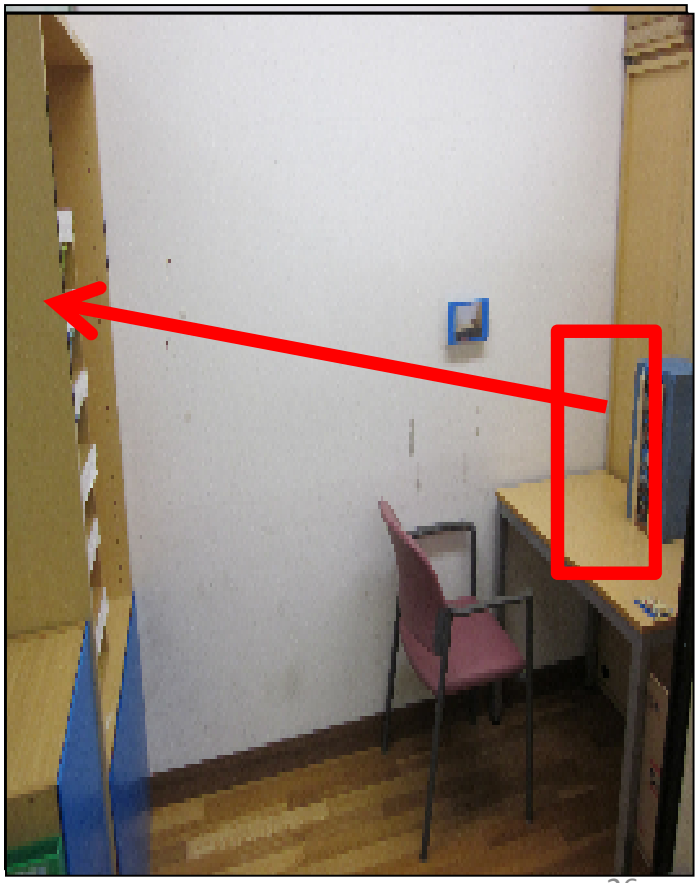
ワークシステムの一例





＜課題棚を本人の横や前に置かない構造＞

- 上から順に取り組むことが難しい
- 刺激を受けて、課題棚が気になって集中できない
- ながら行動（ワークシステムをしながら課題に取り組む）をしてしまう



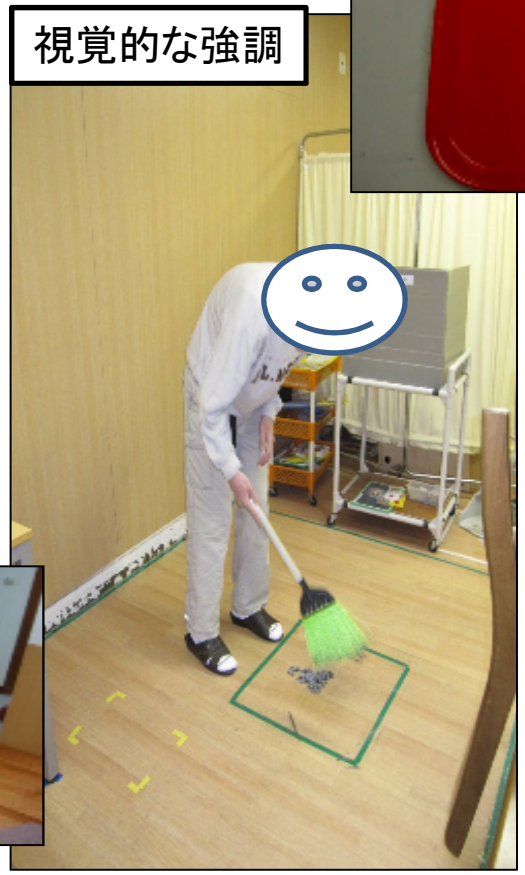
分かりやすくするための環境設定

- 不要な刺激を避ける
- 不要な物は置かない
- 活動と場所の1対1の対応
- 明確な物理的、視覚的な境界を設定する
- 重要な情報に注意が向けられるようにする

刺激の軽減策

- 視覚的な刺激
- 他者の声、音
- 寒暖（空調に注意）
- 光

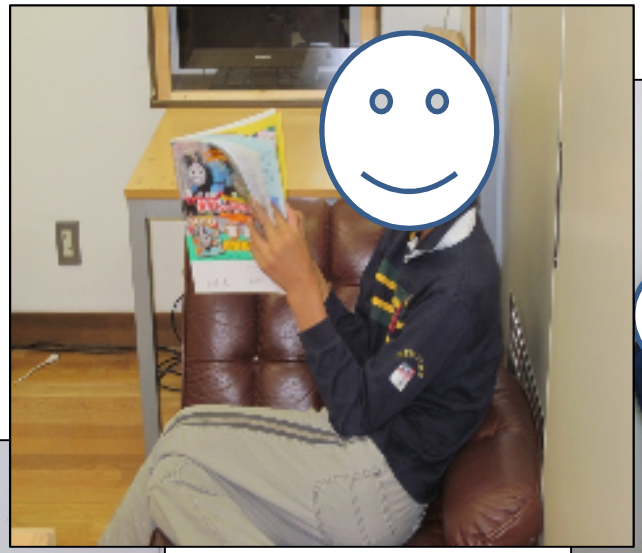
視覚的な強調



休憩

- 心身をリフレッシュするために
- 具体的な設定が何もない中で過ごされる方
  （例：ソファーのみ、横になる）
- 具体的な過ごし方の設定が必要な方
  （例：TV、DVD、CD、おもちゃ、色塗り…etc）
- 在宅中やこれまでに使ってきたグッズやスキルを活用する

休憩



始まりや終わりを知らせる

- 休憩場面で始まりや終わりを知らせるために活用した
- 時間の流れが分からない方も、「音が鳴ったら終わり」との理解に結び付けられるようプロンプトする

指定された時間を打刻する

時計とのマッチング

休憩の代替方策

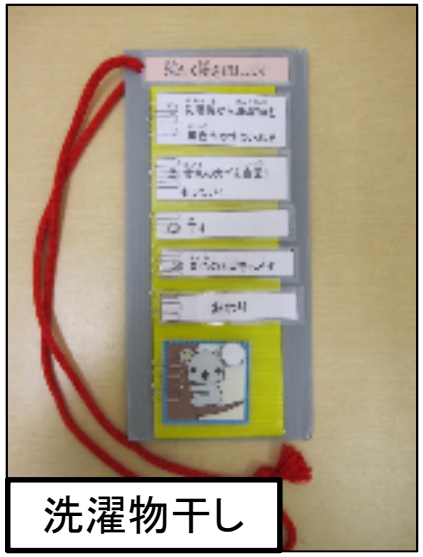
- 休憩ができない方は、次のように具体的な活動を提供することで、本人の特性に配慮した過ごし方とした

家事活動

- 文字の分かる方に指示書で提示
- 順に、行程を具体的に

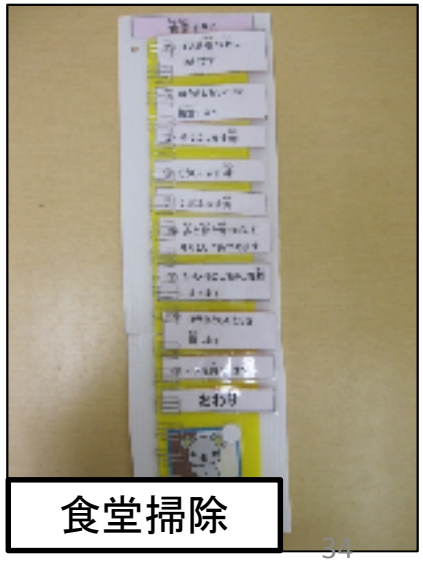
指示書を基に洗濯

洗濯



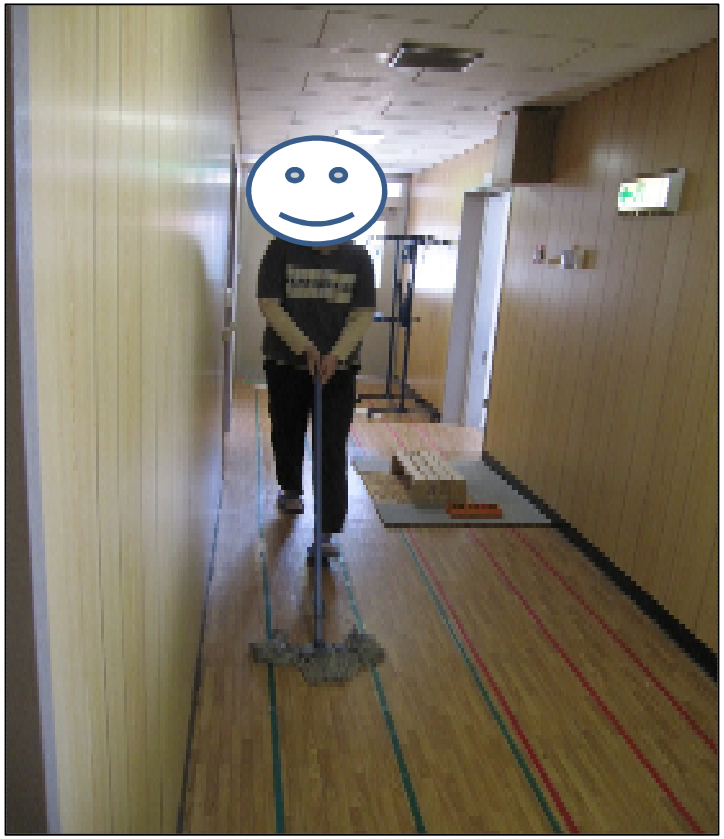
洗濯物干し

洗濯物たたみ



食堂掃除

カラーテープを目印にモップがけ



コミュニケーショントレーニング

- コミュニケーションの特徴を捉え、要求を表出できるようにするためのトレーニングを中心に実施している
- 絵カードや実物写真を使ってやり取りを繰り返しトレーニングする（＝PECSの手法を参考に）
- 本人の興味のある物事や場面を活用するが、おやつや食事は興味が非常に強く、コミュニケーショントレーニングに適している
- “要求する” → “伝わる”という経験を通して、適切なやり取りを強化する

コミュニケーション

食べたいおやつを伝える

食べたいおやつを紙に書いて伝える

おかわりの要求

コミュニケーションカード

見たいDVDを伝える

3. 成果と課題

困難な状況

パターン化しやすい特性に着目し、正の行動を繰り返し行い、自立化を目標としてきた

- 自傷・他傷行為の頻発（＝肯定的な関わりといっても時には制止が必要）
- 声をかけたり、トラジションカードを渡すだけで自傷行為を始めることがあった（＝活動が進まない）
- わずかな音にも反応し、噛み付き行為をするケースで、支援員は頻回に負傷した

- 休憩中の便触り等の不潔行為が頻回にあった
- 人とのかかわりに固執するケースは自立化が困難（＝過剰にプロンプトを求める）
- 余暇スキルがないケースで困難を伴うことが多かった（＝余暇を作り上げることは難しい）
- 医療とも連携するが、行動障がいそのものの改善は、投薬治療に頼った対応だけでは困難である（＝支援を構築していくしかない）

ターゲットはSpace

- 支援学校卒業後の将来を見据えて、<u>自立度を高める</u>こと
- Space（スペース）・・・「必要だけれどもさりげない」

→異なる文化を持つと言われる自閉症児が当たり前のように支援を受け、また、落ち着ける環境設定がある、安心して過ごせる場所

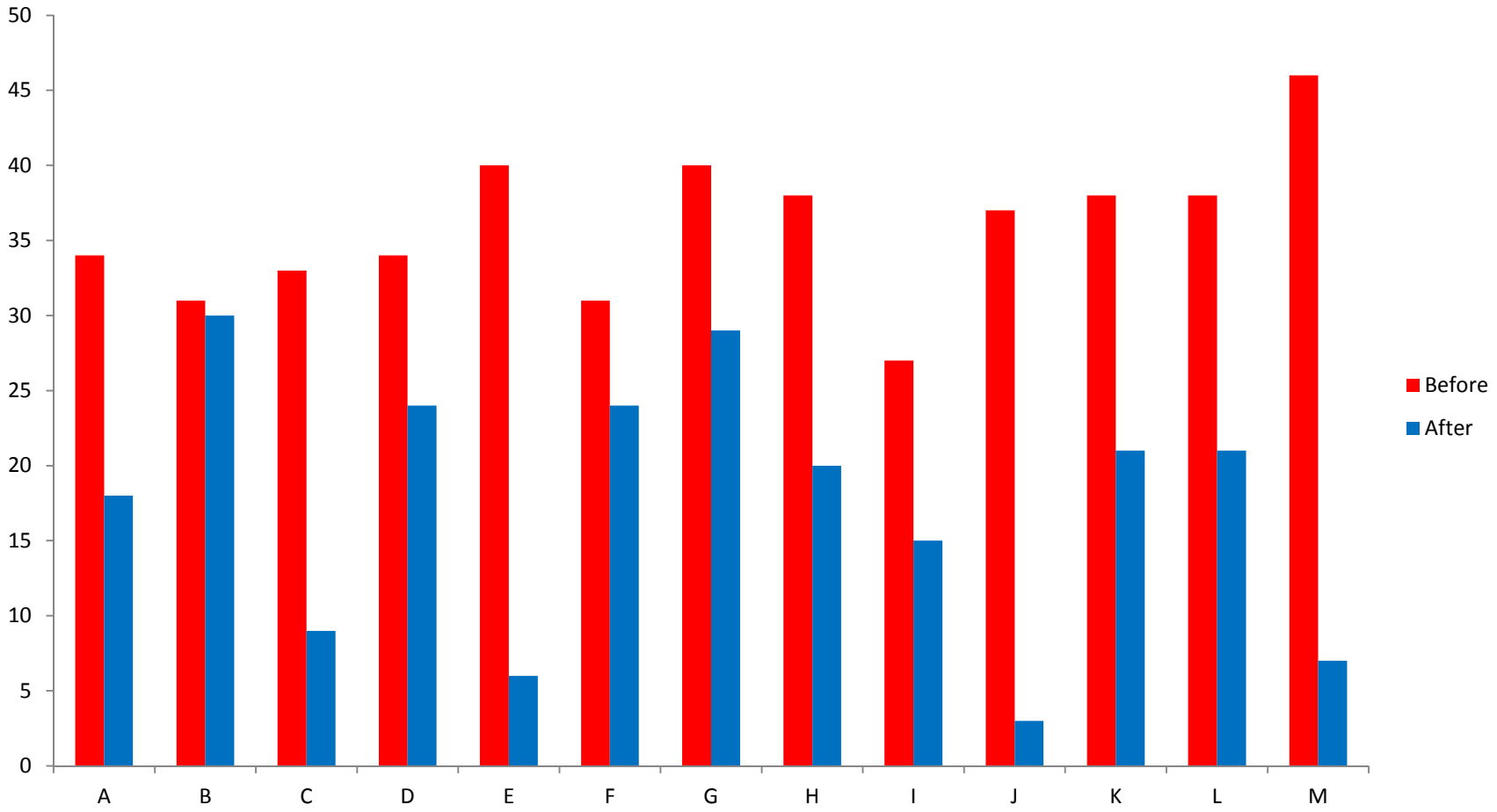
→さまざまな生活場面、活動場面に、みんなの居場所（＝Space）を作っていく

療育活動を通して

- 視覚的構造化による支援は、活動への理解を深める一助になった。また、対象者の障がい特性をしっかりと捉えながら、再構造化を繰り返すこと（＝改善の視点）で、行動面が安定化した
- 療育で得たスキルや活動を生活棟などに般化することで、生活の安定化にも寄与した

頻回に発生していた、自傷・他傷行為、破壊行為等の不適切な行動が減少したことで、対象者の生きづらさや生活困難を、ある程度軽減できた

スコアリングから見る改善度



今後に向けて

- 地域にSpaceを作り、地域移行を実現する（＝情報発信と連携）
- 新ケース受け入れ→地域 or 他施設移行実現⇒<u>新ケースの受け入れ</u>の好循環を継続する（＝滞留化させない）
- 次のスキルリーダーの育成
- 持続可能な事業とするため、ノウハウの伝承

ご清聴ありがとうございました

Thank you for your attention to my presentation